
山頂で獅子と踊る

太郎鉄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

山頂で獅子と踊る

【Nコード】

N6805C

【作者名】

太郎鉄

【あらすじ】

神立弘樹は、弟が死んでからの十年、それまでの自分とは打って変わって、真っ当に生きてきた。生前、弟はよく言っていた。「兄ちゃんは百獣の王なのさ。だから、百獣に王の座を狙われるんだ」自分が、百獣の王だと思った事はない。それでも、高校時代、神立弘樹を狙う者は後をたたなかつた。悪い冗談をいうな。弟にはそういった。三十歳を前にして、神立弘樹は、再び、何か得体のしれない組織に狙われるようになった。敵は、百獣の王だった。

一話、百獣の王（前書き）

暇つぶしに、通勤途中や、通学途中にでも、目を通して頂ければ、幸いです。

一話、百獣の王

帰宅途中の、山手線の中だった。

外は、暗い。街の光も、消えているような時間だった。席は空いていた。俺は手すりに頭をもたれながら、腰をかけている。

西日暮里で、二人組の男が、乗ってきた。一人は、赤いセーターに紺のスラックス。太い、金色のネックレスを首からさげたチンピラだった。年は、若い。

もう一人は、チンピラと対照的に、身なりを整えていた。ネクタイをきつちりと締めたその姿はサラリーマンのようにも見えるが、眼鏡の奥にひっそりと存在している、暗い光を携えた眼光は、堅気のそれではなかった。

二人の男は、無言で俺の対面に腰を落ち着けた。チンピラはしきりに、こちらを睨み付けてくる。

見覚えは、なかった。つまり、目の前の男を叩きのめした記憶がない、という事だ。すなわち、怨みを持った覚えも、ない。

田町で、降りた。二人の男が同時に席を立った。

階段を登り、改札へ向かう。酔っ払いがうずくまっていた。ゲロが、階段の縁から滴り落ちている。

改札を出て、眠りについたオフィス街へ足を運んだ。迷路のようなコンクリートジャングルを、右へ、左へ、でたために歩いた。ふ

と、細い路地を見つけた。覗くと、袋小路になっている。路地へ入り、足を止めた。

男二人の足音が、ついてきた。

「かんだつひろき神立弘樹さん、ですね」

サラリーマン風の男が、俺の名をいった。懷から、何かを取り出している。暗くてよく見えないが、名刺入れのようだった。

名刺を一枚、差し出された。

「失礼、私、こういうものです」

名刺をみた。株式会社ビリオンバード。実行部主任、やまだたろう山田太郎とある。冗談で創られたような、名刺だった。実行部主任という肩書きが、気になるといえば、気になる。

「聞いた事がない」

俺は名刺をもみくちやにして棄てた。

「うちの会社を？」

「あんたの会社も、実行部主任という、肩書きも」

「山田太郎という名前は？」

冗談を口にするタイプの男には見えなかったが、読み違いだったらしい。

「何かの例としては、よく聞いた」

「そうですか。私は生まれた時から、山田太郎という名前でしたよ」

偽名ではない、という事らしかった。いまいち、読めない。

「神立さんは、S社に勤めておいでですね。勤続五年。それで、すでに部長職に就いていらっしゃる。大したものですよ」

「小さな、会社だからだ。それに、若い。他に、人がいないだけだ」

「謙遜なさらなくても結構。貝塚さんは、あなたの事を高く評価していましたよ」

貝塚は、社長の名前だった。悪い男ではないが、口が軽い。

「社長の、知り合いか」

微かだが、男の口の端がつり上がったように見えた。

「知り合いと、言えばね。知り合いですよ」

回りくどかった。俺に何の用があるのか。それをはっきりさせなければならぬ。

「何か、用があるなら、言え。明日も、朝は早いんだ」

「失敬。単刀直入にいいましょう。引き抜きですよ。神立さんを、是非我が社へ迎えたい」

まっとうな種類の引き抜きのはずはなかった。まっとうなものには、手続きがある。真夜中の路地で行われる引き抜き。面白味はあるが、興味はなかった。

「断る」

「いいですね。決断も早い」

歩き出した。後ろから、チンピラに肩を掴まれた。

「待てよ、おい」

ドスを効かせているつもりか、ダミ声だった。脅せば、屈する男だと思われる。それは、癪に触る。

「何の、まねだ」

山田に、聞いた。

「うちの方針ですよ。強行なくして、成功なし」

頭の悪い、政治家のキャッチフレーズに聞こえた。

「そういう方法が好きなら、付け加えておいた方がいい。詳しい説明も、必要だつてな」

「あなたがイエスと言ってくれば、二十四時間体制で説明しま

すよ」

「やれやれ、としか、いえない」

チンピラの腕を、振り払った。それと同時に、気がつく。筋肉は、ある。ただのチンピラではなさそうだった。

「野郎！」

左の、正拳突きだった。俺の顔面を捉えようとしたそれを、右手でいなした。重心さえ見極めれば、難しい事ではない。

チンピラは意外そうに、山田は表情を変えずに俺を見ていた。

「目を、潰すぜ。坊主」

予告した。急な言葉に、チンピラは無意識に反応し、大股開きで顔面をガードした。

股間を、蹴り上げた。身悶えながら、チンピラが目を見開いて絶叫をあげる。左目に、人差し指を突っ込んだ。プリンのような感触がしたあと、チンピラは倒れた。

山田が、拍手をしていた。

「お見事です。少々、汚かったですね」

「まるで、あんたらが綺麗みたいな言い方だな」

山田は、何も言わなかった。

「あんた達が、どういう目的で、俺に接触したのかは知らない。興味もない。帰るぜ。文句はないな」

「今日のところは」

明日以降も、同じ事が続くかもしれない。山田は、しつこそうな男だった。

明日、社長に聞いてみようと思った。山田が何者で、何故俺を狙うのか。

兄ちゃんは、百獣の王なのさ。

ふと、雅樹まゆぎの言葉が、頭に浮かんだ。

兄ちゃんは、百獣の王なのさ。だからさ、百獣から、王の座をいつでも狙われてるんだ。

悪い冗談はやめろ。俺は弟にその言葉を言われる度に、そう、答えてきた。

大通りに出て、タクシーを拾った。帰路に、ついた。

山田の言葉が、反芻している。今日のところは。今日のところは。今日のところは。

兄ちゃんは百獣の王なのさ。

悪い冗談はやめろ、と、口にだしそうになって、思いとどまる。

二話、人材派遣

翌日、定時に出社した。タイムカードは、ない。かといって、残業代がちよるまかされているというわけでもなかった。

社長の貝塚は、そういう男だった。

オフィスは、池袋にある。くたびれた集合ビルの三階を借りている。社員は、八人。五年前に社員が興した、小さな会社だ。

広告代理店。業種でいえば、そういうところだった。

俺は、自分のデスクに座った。隣には、香苗^{かなえ}が座っている。一応、各々のデスクはボードで仕切られてはいるが、あまり、意味はない。香苗は、椅子を回転させて、暇そうに俺に声をかけてきた。実際、今の時期、仕事らしい仕事は、なかった。オフィスには、まだ香苗しか出勤していない。

「部長、今日も早いですね」

「普通だろう」

「だって、今、暇なのに」

「暇だから、遅く来ていいという理由はない」

「でも、社長だって、どうせ昼過ぎまで来ないじゃないですか。タイムカードもないんだし、私だって今日の鍵開けの当番じゃないやこんな早く来てませんよ」

苦笑するしかなかった。香苗は、去年、入ってきた。俺より四つ下の二十四だが、いまだに仕事らしい仕事をしているところを、見た事がない。

社長の愛人だ、という噂がある。どうでもよかった。ただ、香苗の入れる茶は美味い。会社にいる理由は、それだけで充分だった。

「そういえば、さっき、部長宛てに電話かかってきましたよ。ビリオンバードの、山田って人から」

予想以上に、早かった。今日のところは。山田の声が、耳元で響いたような気がした。

今日のところは。明日、また。

「何か、言っていたか」

「神立さんはいらつしやいますか。まだ出社しておりません。また電話します、ガチャ」

香苗が大袈裟に肩を竦めるジェスチャーをした。

「これ、仕事の電話ですか？」

「さあ、な」

そういうと、香苗は興味を失ったように、パソコンをいじくり出した。趣味はネットサーフィン。そんな事を、新人歓迎会で言っていた。

俺も、パソコンを立ち上げた。メールは届いていない。インターネットで、ビリオンバードを検索した。四件、引かなかった。

一件目は、ビリオンバードのホームページだった。クリックして、業種をチェックする。

人材派遣会社だった。百億の未知の可能性を秘めた小鳥達を、あなたの会社で試してみませんか？ 社名の由来は、そういう事らしい。

人材派遣は、うちの会社もよく利用する。特に、クライアントからサンプリング、つまりはビラ配りの依頼があった時などは、付き合いのある派遣会社に依頼し、アルバイトを雇用して実行する。

求人広告のページにアクセスした。営業部、人材マネジメント部、広報部。実行部という項目は見つからない。

所在地は新宿の百人町。年商は五億。そこそこの会社だった。今のところ、きな臭い部分は見つからない。

やはり、社長に尋ねるしかないようだった。

正午まで、雑務をこなしながら、過ごした。昼飯に行こう。そう思った時に、社長がやってきた。

恰幅のいい、男だった。他愛もない言い方をすれば、肥えている。年は四十だったが、頭髮だけではなく、顎髭まで白くなっている。

文字通り、重い腰を社長が降ろした。俺は立ち上がり、窓際の社

長のデスクに向かった。

「よお、神立。儲かってるか」

儲かってるか、は、貝塚の挨拶だった。

「あんまり、ですね。社長にいうのも、何ですが」

声を上げて、貝塚は笑った。四十を過ぎても、貝塚には、どこか少年じみたところがあった。

良くいえば、親しみやすい。悪くいえば、幼い。

「で、どうした。遅刻の説教なら聞かんぜ。ガキの頃から、遅刻は俺の専売特許だったんだ」

俺は微笑んだふりをしながら、デスクに両手をついて、貝塚の耳元で、囁いた。

「ビリオンバードの、山田という男を知っていますね」

貝塚が、笑うのをやめた。目つきが変わる。親しみやすい社長の顔は消え、本来の、貝塚という男の鋭い目つきになっていた。

「野郎、お前にもちよっかい出してきやがったか」

同じ音量で、貝塚が答えた。

「俺にも？」

「酒に、付き合えや、神立。明日は休みだろう。少し、長い話になるぜ」

貝塚の話は、長い。断らずとも、決まって長い話をされてきた。

その貝塚が、長いと、いう。事は、思っている以上に、重大だった。

夜、貝塚と共に、銀座の料亭で、酒を酌み交わした。

座敷。テーブルを挟んで、貝塚がビールジョッキを片手に、この店いち押し、懐石料理に箸を伸ばす。俺は手酌で、熱燗を一号、空けていた。

「田口、ここ三日、休んでるだろ」

玉子焼きを噛み締めながら、貝塚がいう。田口孝太郎。うちの会社の創立メンバーの一人だった。つまり、俺と同期にあたる。

田口は、風邪をこじらせて休んでいると聞いている。

「風邪じゃない、そういう事ですか」

「酒の席で、かしこまるなよ、弘樹。話がな、余計に重くなる」

二人きりの時、貝塚は俺を性では呼ばない。そういう事に、こだわる男だ。

「そういう間柄じゃねえだろうよ」

兄弟。初めて、貝塚と会ったあの時、この男は、俺にいった。

今日から、弟になれ。俺とお前は兄弟になる。兄弟で、天下をとる。

「わかったよ、話を続けてくれ」

「田口は、山田にやられた」

それは、わかってる。強行なくして、成功なし。田口は、強行された。山田ではなく、恐らく、あのチンピラに。

「あんたと、知り合いだと、あの男はいったぜ」

「弘樹よ、お前は無事みてえだが、手え出されなかったのか」

俺は熱爛をもう一号頼み、呑みながら、昨日の出来事について話した。

「……お前らしいな、弘樹」

「別に、はなから叩きのめすつもりはなかったさ。ただ、そうせざるを得なかった」

兄ちゃんは、百獣の王なのさ。

「叩きのめされた方が、よかったかもしれねえな」

三分の一ほど残っていたビールを、貝塚は一息で呑み干した。

「山田は、お前の事を気に入ったぜ、間違いなく」

今日のところは。明日、また。

「何者なんだ。山田ってのは」

「俺にもう一つの顔があるのは、知ってるだろう」

貝塚の顔が、赤らんできた。酔っているわけじゃない。酔おうとしている。素面で喋るのが、はばかられる話のようだった。

「具体的には、知らない。臭いを、嗅ぎとる事は出来る」

「何の臭いを？」

「獣さ。それも、血に飢えた獣だ」

貝塚は声を上げて笑った。

「牙はもう、抜けたつもりだったがな。弘樹、今、俺と殴り合ったら、どっちが勝つ？」

貝塚の悪い癖だった。話が、逸れる。意図的に逸らしているのかもしれないが。

「俺が、勝つさ。酔っ払いのあんたには、負けない」

貝塚と、殴り合った事は、ある。一度だけだ。それが、出会いでもあった。俺は、貝塚に叩きのめされた。

貝塚は鼻で笑った。

「いうようになったじゃねえか。小僧」

「話を続けるよ。あんたにもう一つの顔があつて、それでどうした？」

「山田も、俺のもう一つの顔を知ってる。山田とは、そっちの顔で付き合っていた」

恋人のようだった。

「そっちの、世界の住人か。じゃあ、ビリオンバードも」

貝塚はゆっくり頷いた。

「ビリオンバードは人材派遣会社だよ」

「それはもう、調べた」

「それは、表の顔だろう。あいつらが本当に派遣するのは、日に当たる世界の住人じゃない」

貝塚は、胡座をかいている脚を組み直した。肘をテーブルに付き、身を持ち出すようにして、囁く。

「プロフェッショナルさ。殺しのな」

吹き出しそうになる。殺し屋。そういう種類の職業に就いている

輩が、いないとは思わない。だが、そういう職業の輩を、派遣する会社があるというのは、どこか、絵空事に聞こえた。

「信じてねえって、そういう顔、してるぜ」

「無理、ないだろう」

「でもよ、事実だ。事実は小説より奇なりという言葉もある」

「言葉が、あるだけさ」

「田口は、殺されかけた」

「あのチンピラが、殺し屋だっていうのか？ 馬鹿げてるぜ」

筋肉は、あった。動きも、悪くはなかった。だが、あのチンピラが殺し屋というなら、殺し屋というのは、素人の俺にすら勝てない、雑魚に過ぎないという事になる。

「そいつは違うよ。予備軍さ。ビリオンバードに、今、殺し屋はいない。大方、テストだったんだ」

「なんのテストだ」

「お前の力量を、計る為の」

「山田は俺を引き抜くといった。それと関係が、あるのか」

今度は、さらに深く、貝塚が頷いた。

「俺と山田は、古い付き合いでな。ここ数年は、疎遠だった。だが、一月前、急に、連絡があつて、酒を呑んだ」

貝塚と山田は、敵対関係にあるわけではない。それは、これまでの会話で、伝わっていた。

「ビリオンバードが、ヤバいと、そういう相談を受けたんだ。殺し屋がいない。このままじゃ、潰れるってな」

「殺しの人材派遣に、何で殺し屋がいないんだ」

「全盛期は、十人以上いた。でもな、この一年で、みんな殺されちまつたんだとよ」

震えた。手が、脚が、心臓が、震えた。一瞬だったが、確かに、震えた。

「誰に、殺された」

「別の殺し屋さ。業界じゃちょっとした著名人だ。ライオンっていう、奴がいる。現役の殺し屋じゃ、間違いなくトップの腕を持つてる」

ライオンという名の殺し屋。馬鹿げてる。何もかも、貝塚の話は、馬鹿げてる。しかし、手は、脚は、体は、心臓は、震える。一瞬だが、間隔を置いて、震える。

「山田は、というか、ビリオンバードは、ライオンを殺そうとしてる。ライオンを殺せる、殺し屋を創ろうとしてるんだ」

それに、兄ちゃんは選ばれたのさ。なんせ、兄ちゃんは百獣の王なんだから。

「悪い冗談は、やめろよ」

呟く。不思議そうに、貝塚が俺を眺める。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6805c/>

山頂で獅子と踊る

2010年10月15日17時42分発行